四、「巡遊伶人」

工藤　隆

1

文学と「巡遊伶人」との関わりについて、折口は例えば次のように述べている。

巡游伶人とも名づくべき団体が、国中を廻ると共に、物語や、歌を撒布して過ぎたのである。(『小説戯曲文学における物語要素』、全集⑦)

巡遊伶人は、歌やほかひを持って諸国を歩き、村々を流浪した。さうして、この人々は、祖国の神々に関係の深い文学、並びに叙事詩を語って歩く、これが、ほかひ人の為事であった。(中略)　日本のほかひ人の持って歩いたと思はれるものに、哀れな事件を歌ったものが沢山ある。これが粗野な民族に潤ひを与へ、物の哀れを知らしめ、さうして文学的な情操を養ひ培って行った。(『歌及び歌物語』、全集⑩)

しかし特に注目すべきは、「いしたふや　あまはせづかひ　ことの　かたりごとも　こをば」や「ことの　かたりごとも　こをば」で終わる、記の「神語(かむがたり)」・「天語歌(あまがたりうた)」を、「海部の諷誦・巡遊した詞章である」とし、更に、

記紀には、まだ他にも、同様な事情にあると見られる歌があるが、此等は一度、海人の口誦を経て、再、宮廷に這入って来たものなのである。かうした事実は、海人に限らぬ訣で、巡遊伶人の持ち歩いた詞章は、宮廷に取り入れられる一方、国々村々に撒布せられて、くにぶりを誘導して来たのである。(『上世日本の文学』、全集⑫)

と述べ、記紀の成立過程に既に「巡遊伶人」の具体的な関わりのあったことを想定している点であろう。

さて、「巡遊伶人」の定義であるが、次の一節が一応簡潔にして要を得ている。

此国の到る処の山陰や海沿ひの村々に、叙事詩を撒布して歩いた旅行団体を、私は、巡遊伶人と名づけてゐる。神人にして、芸人である。此主流をなすものは、海部の民であった。これと混流し、而も互に区別を存してゐたものが、山部の末である。(同右)

ところで、この「海部の民」に対応する「海語部(アマガタリベ)」について、

彼等は民間より出て宮廷に入ったが、大部分は尚、民間を遊行して居た。(中略)かうして、ほかひして廻った結果、ほかひゞとの階級を形づくった。(『国文学の発生』第四稿、全集①)

と述べて「ほかひびと」との関連を示し、一方で、万葉集巻十六の「乞食者」を「ほかひによって口すぎをして、旅行して歩く団体の民」(同右)とし、また「ほかひゞとは、寿詞を唱へて室(ムロ)や殿のほかひなどした神事の職業化し、内容が分化し、芸道化したものを

持って廻った、最古い旅芸人、門づけ芸者である」(『国文学の発生』第二稿、全集①) とも述べていることなどから、「巡遊伶人」と「ほかひびと」とはほぼ重なり合うものとしてイメージされているようだ。他にも、「漂泊伶人」・「遊行伶人」・「遊行神人」・「巡遊伶人団」・「巡游神伶団」・「巡遊神人」・「巡遊詞人」などの語があるが、その各々に厳密な使い分けがあるわけでもないので、「ほかひびと」も含めていずれも「巡遊伶人」で代表させてよいもののようである。

2

「巡遊伶人」の登場の時期については、「少くとも、奈良朝以前から既に、巡遊伶人があった」(『国文学の発生』第三稿、全集①) と断じ、また、

書物の記載を信じれば、藤原朝に既に語部が、邑・家・土地から游離して、漂泊伶人としての職業が、分化して居た様に見える。(『国文学の発生』第一稿、全集①) ほかひと言われる道具の元は、巡遊伶人が同時に漂泊布教者であった事を見せて居り、長旅を続ける神事芸人の団体が、藤原の都には既に在った事を思はせる (後略)。(『国文学の発生』第二稿、全集①)

と、具体的に「藤原の都」(いわゆる藤原京のことであろう。六九四年遷都、七一〇年まで) の時代を提示しているが、確たる論証まではなされていないようだ。「書物の記載を信じれば」とあるその「書物」が何を指すかも明示されていないようであり、従って、あくまでも一つの仮説として受けとめるべきであろう。

さて、「巡遊伶人」の構成階層の源については、いくつかの論文を合わせ考えてみるに、「海部の民」・「山部の末」・「海語部」・「語部」・「先住民の落ちこぼれ (くゞつ・うかれめ)」・「浮浪民(うかれびと)」などを想定しているようだが、加えるに「団体亡命」者としての神人達の存在をも強調している。主に『国文学の発生』第二稿・第四稿 (全集①)・『上世日本の文学』(全集⑫) によって、その要点をまとめてみよう。

(1)神人の大檀那である豪族が、倭宮廷によって滅ぼされた場合。

早く滅された国邑の君を神主と仰いだ神人たちは、擁護者と自家存在の意義とを失うて了うたのである。此が、ほかひゞととして流離した最初の人々であらう。神人は、大倭の顕つ神の宰たる国司等の下位になった神の奴隷として没収せられ、虐使せられる風があった様だから、どうしても亡命せねば居られなかった地方もあったであらう。(『国文学の発生』第四稿)

日向国風土記逸文吐濃峯条の、日向国守が吐乃(つの)の大明神の神人を駆り使って国役(くにのえだち)に従わせたので、大明神が怒って疫病をはやらせて神人の種を絶やしてしまった、という伝承を例証にしての推理である。

(2)豪族が滅されぬまでも、倭宮廷の影響によって村君 (豪族の長) の信仰の内容に変化が生じた場合。

㈠倭宮廷の神をとり入れるか、翻訳して垂跡風にした類、㈡変質しつつも新来神(イマキガミ)として倭宮廷にも畏敬せられる形で生き延びた類、㈢道教の色あいを多分に持った仏教、変化の形態にはこの三つがあったのだが、

此信仰の替り目に順応する事の出来なかった地方では、段々「神々の死」がはじまって来た。さうした神々のむくろを護りながら、他郷に対しては、一つの新神があると言ふ威力を利用し

て、本貫を脱け出す者が、後から〳〵と出た。（『国文学の発生』第二稿）

また、

中でも、村君と血統上結びつきのない、神の本縁を説く神人たちは、内外から受ける圧迫に抗し切れず、夙く亡命の旅に出ねばならなかった。（『上世日本の文学』）

この(1)・(2)の場合の神人の「亡命」が歴史的実在であったことを確証する資料までは示されていない。しかし、推理としてはよくできた推理であると言えるだろう。

3

「巡遊伶人」への道筋として、以上見てきたのとは性質を異にする、いわゆる「まれびと」からの方向性についても折口は考えていた。

大晦日・節分・小正月・立春などに家々を訪れたまれびと（おとづれ人）が、神であることが次第に忘れられるようになると、若い衆の演じた「神群行の聖劇」（『唱導文学』、全集⑦）は、妖怪（例えば、なまはげ）へと、また子ども仲間の年中行事へと転じ、あるいは専門の祝言職に任せるという形をとるようになる。

さうして、祝言職の固定して、神人として最下級に位する様に考へられてから、乞食者なる階級を生じることになった。

おとづれ人＜妖怪
祝言職――乞食

（『国文学の発生』第三稿、全集①）

乞食者については、寿詞（ホギト）またその中に含まれる神の叙事詩、またそこから展開した叙事詩的な呪言を伝誦していた一種の職業者（村々の語部）が職を失って放浪する者ができた、それが乞食者（ホカヒビト）である。といった言い方もしている（『万葉集の解題』、全集①）ように、決して単一な像を結ぶものではないようだ。ここでは、「乞食者は祝言職人である。」（『国文学の発生』第四稿、全集①）の言い方のほうに近いとしてよさそうである。

要するに、まれびと群行の民俗・祭祀の変質・衰退と併行する形で、最下級の神人たちの中から出たホカヒビト達によってその民俗・祭祀が担い直される、という論理であり、後世の数々の門付け芸能者のあり方から逆推する限りにおいて、承認し得よう。

なお、巡り来る神には、罪人として追放されてさまようスサノヲの伝承（紀一書）、雑雑の罪事を引き受けてさすらうハヤサスラヒメの伝承（大祓の祝詞）、疫病を引き受ける来訪神武塔の神の伝承（備後国風土記逸文）、「厄払い」など後世の門付け芸人の存在、などから考えて、罪・けがれなどを引き受けて去る側面もあったかと思われ、この点でも「巡遊伶人」は活動していたと推定できそうであるが、折口は、

室町になると、「ひひな廻し」が出るが、これが使うのは人形なのである。私は「くぐつまはし」という語は平安朝あたりで亡びていて、室町では既に古典であったと考える。「ひひな廻し」が諸国を歩くということは、ひひなを踊らせながら、祓えを進めてまわるのである。（ノート編全集⑤）

と、わずかに示唆したのみで、展開まではしていない。

最後に、以上のような折口の「巡遊伶人」像に対する時に我々が

念頭に置いておかねばならぬことを、ごく簡単にまとめておこう。

(i)文学の発生の一大契機としての位置づけが主関心であるためか、その携える〈ことば〉の側面に力点が置かれ過ぎていること。芸能者としての「伶人」の全体像としては、他の部分での折口自身の、芸能者についての指摘その他によって、まだ補われねばならぬ側面がいくつかあろう。

(ii)これは前項(i)とも関連するが、〈ことば〉の側面に視点をしぼったとしても、その運搬・伝播の役割にのみ把握が偏向していること。例えば、芸能者によって担い直されることによって、祭祀・神事の〈ことば〉が祭祀・神事の場から切り離され、変質して行く契機となり、それが文学へと関連して行く、といった視点が考慮されるべきであろう。

(iii)推理と論理的整合性との産物でしかない存在なのだが、あたかも歴史的実在として証明済みであるかのような筆致で書かれていること。

(iv)これは前項(iii)とも関連することだが、例えば「漂泊布教者」といった語に典型的なように、中世以後の高野聖・熊野比丘尼といった類の人々からの連想が濃厚であるかも知れないこと。歴史学的に或る程度芸態の知られる後世の芸能者たちの姿を媒介にすることは当然だとしても、その古代におけるあり方とどの点は同じでどの点は違うのかといった厳密な区別づけをして。先に進む必要性を、あまり感じていなかったように見える。

(v)「乞食者（ホカヒビト）」の説明や、「巡遊伶人」の構成層の原型部分の説明の仕方に典型的だが、一つのことについていくつかの論文でそれぞれ異ったいくつかの言い方をしているという具合なので、それら全部を眺め渡してどうにか全体像を想定し得るといった態のものであること。

以上、主な五点を挙げておいた。

五、柿本氏族の「人麻呂」たち

高野正美

一

折口信夫は、古代の人物伝を考える場合、まず第一に考慮すべきはその人の属していた氏族について知ることだと説く。それは記録上個人の歴史と思われるものでも「数代に亙っての出来事の綜合」であったり、「其族長たる人の誰の上にも、通じて称せらるべき家伝の根柢なることに繋がってゐる点が多い」からだとし、これを人麿論の根底に据えている（1）。以下、柿本は垣の本で、それは宮廷領の境界を守ることを意味し、「地境において、霊物の擾乱を防ぐのにあったらしい」と言い、さらに人麿の名に言及した上で、柿本氏人は「巡遊神人」であったろうと推定している。これは柿本氏が霊物と関わるとの推定や和邇氏の分れ（小氏）で、和邇神を斎く